

聴 解 4

小河原 世津

Listening Comprehension 4

OGAWARA Setsu

週1回 (10週)

20人前後

コースシラバス作りにあたって

「聴解が苦手だ」ということを言う学習者は少なくないように思う。そのような学習者にはどのような練習を準備すれば聴解が出来るようになるのであろうか。また「耳がよくないから聴解がよくできない」と言う学習者にもよく会うが、出来ないのは本当に耳がよくないからなのであろうか。例えば、「きくちさん」が無声化して「きっちさん」と聞こえた、また「とうちゃくじこく」を考えながら話し、長音が引き延ばされたものが、「とうちゃくうじいこく・・・」と聞こえた、という場合には、耳自体は正しいわけである。耳がよければ聴解が出来るというものではなく、耳から入った音声情報を既存の知識と照らし合わせて「きっち→菊池」「とうちゃくうじいこく→到着時刻」と変換できるかが重要ということになる。では、「～から聴解がよくできない」という場合の「～から」には何が入るのか、何ができれば聴解ができるようになるのだろうか。

文法や語彙などの学習では、授業でやったことを実際に目にしたりすれば学習したことが役に立った、思えるであろうが、聴解の授業では、授業でやったことに実際の場面でそのまま出会うということはあまりないのではないかと思う。授業で聞いたものの内容が理解できたとしても、それはその教材に関してでありその場限りのことである。クラスで日本語を学習しても、結局は自分で現実の日本語場面に対処し、切り抜けていかななくてはならない。よって、授業は学習者が自分で現実場面に対処していく際の方策について、考えてもらう機会とし、聞き取りをするときに行うであろう内的な作業を学習者に提示し、意識してもらい、それを訓練する、という授業を目指した。

目 標

このクラスでは、①自分が今まで勉強したことを使いながらいろいろな聞き方をしてみる、

②自分の得意なこと、不得意なことを知る、の2点を目標にしている。

具体的には、①については学生に「言葉は目と耳で覚えよう」と言って、文字だけで言葉を覚えていくのではなく、その言葉がどのように聞こえるのか、無声化が起きるときも含めて実際の音声にも注意してもらおう。そして、特に音変化などが起こって聞きにくい場合でも、単音の聞き取りなどに代表される、いわゆる「耳だけに頼った聞き取り」ではなく、これまでの文法や語彙、またそれ以外の様々な知識を利用して理解の助けにすることを意識するよう促す。②については、母語の影響などもあり、どうしても苦手な部分というものはあるものである。そういった場合でも、自分の苦手な部分を知っていれば注意した聞き取りができるかもしれない。誤解したままにならないように、疑いを持って確認したり、間違っていた場合のほかの可能性を考えたりということができれば、苦手な部分に関してもできる限り対処できるだろう考える。

授業の内容と教材

クラスでは、授業活動を聴解Aと聴解Bの2つに分けている。Aでは短い言葉や文を聞いて細かい正確さを問う聴解活動を通して、例えば数字の聞き取り、音変化の起こったものの元の形の推測など、具体的な聴解技術の練習を行う。Bではある程度の長さともまとまりをもったものを聞いて、内容を理解するような聴解活動を行っている。そして必ずではないが、BではAで練習したような聴解スキルを利用するような内容のものを選んでいく。

具体的には、例えば今年度の1学期の授業は次のような内容であった。

	聴解A (ねらい)	聴解B (ねらい)
1	得意・不得意な音 (聴解活動の意識化)	聞いて反応 (資料の該当部分を探す)
2	①長い音 (長音と表記)	① いくつ言ったか1 (接続詞などを目印にする)
3	②言葉のきれめ (アクセントによる言葉のまとまり)	②いくつ言ったか2 (言葉のまとまりを聞く)
4	③音の変化 (縮約形)	③会話1 (縮約形を含む話し言葉)
5	④聞きにくい音 (無声化する音)	④A=B (言葉の定義、言い換えなど)
6	⑤○? ×? どちらの意味? (文末の「じゃない」)	⑤会話2 (その発言の意味は肯定か/否定か)
7	⑥数字 (1) (桁の大きい数字)	⑥表やグラフを見ながら1 (データの説明)
8	⑦数字 (2) (割合、小数など)	⑦表やグラフを見ながら2 (データの説明)
9	VTR 視聴・クローズアップ現代「キャラクタービジネス」(実際のテレビ番組を聞いてみる)	
10	最終テスト	

教材は、A では教師自身が録音したものを使う場合もあるが、ほとんどが中級程度の市販されている日本語学習用聴解教材の音声を多く利用している。タスクシートなどはそのときの活動にあわせて作成し、その都度配布していた。

語彙リストは、そのときの活動の狙いによって前もって配布するときもあればしないときもあった。リストの形式も、語彙を単に並べたものから、聞き取りの内容に関する周辺の知識を活性化するよう、様々な情報を入れたもの、または音声による語彙リストなど、様々な試みがあった。

授業形態

授業の最初に先週の復習のクイズをし、その後聴解 A, B をする。LL 教室を使っているので、LL を利用することもあるが、途中でテープを止めて説明や指示をすることが多く、ヘッドホンのつけはずしや LL 機器のわきで書く作業のわずらわしさから、教師が教壇にテーブルコーダーを置き、直接操作して聞き取りをする方が多い。

評 価

毎回のクイズ(合計7回程度)、最終のテスト、そのほか宿題などの提出物の回数を総合して最終の成績を出した。最終テストは授業でも使用した音声と使用していない音声によるものが半々くらいの出題になっている。欠席が少なく、クイズもほとんど受けて提出物も出しているような学習者には、大体及第点以上がつけられた。おおよその学習者が最終テストでは6割以上取れるのであるが、欠席が多く、クイズや提出物の回数が少ないような学習者の中には、D判定がついてしまうような学生も、各学期1~2人くらいはいた。

反省と課題点

この授業では、教材となる音声は市販のものを中心に、練習に使えるようなものを集め、編集したものになった。よって、学習者の興味・関心に合ったものかという点ではあまり考慮されているとは言いがたい。なるべく興味を持ってもらえるものをととは思いつつも、どのような聴解技術を訓練するかを第一に考えたため、どうしても既存の教材等から抜粋することが多く、情報として古かったりすることも多かった。

コース終了後に行ったアンケート調査では、「会話をもっと扱ってほしい」、「ドラマやニュースを聞きたい」、といった声があがることもあった。このようなスキル訓練の授業を今後続けるにしても、できれば、生のテレビ・ラジオ番組などから新しい情報、興味を持つ情報を扱いつつ、狙った聴解技術も訓練できるような内容のものを選定、蓄積して行くことが必要だと思う。

また、現在補講クラスの聴解は、聴解4からレベルごとに設けられているが、聴解のレベルの差がどういう違いをもつものであるのかという議論も必要であると思う。聞くもの、たとえばドラマやニュース、あるいは対談など、素材の差がレベルの差となりうるのか、これは、先に述べた、「～から聴解が出来る/できない」という「～から」の部分が何であるかの議論にもつながると考えられる。つまり、どんなことができるようになれば聴解力が上がるのか、そしてそれは積み上げ式なのか、様々な学生に共通しているのか、ということを考えなければならないのではないだろうか。現在の授業活動では、様々な聴解技術とその訓練の仕方はただ思いつきのように羅列してあるにすぎず、どのような聴解技術が必要で、また、おのおの聴解技術がどのような関係になっているのかなどの裏づけがない状態である。より訓練の効果をあげるためには、さらなる分析が必要であろう。

もちろん、このような訓練を重視した活動が聴解授業のすべてではないのは当然である。しかし、「聴解が苦手だ」という学生にどういったケアをしたらいいかを考えること、つまり、「苦手」の中身を明らかにしてその克服に役立つ訓練を提供すること、そしてまた、そのような訓練のコースを整備しておくことは意味があると思う。